

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390300085		
法人名	社会福祉法人 典人会		
事業所名	グループホーム「後ノ入」		
所在地	岩手県大船渡市赤崎町字後ノ入73番地3		
自己評価作成日	平成28年2月8日	評価結果市町村受理日	平成28年6月22日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.jp/03/index.php?act=on_kouhyou_detail_2015_022_ki_hon=true&Ji_gyosyoCd=0390300085-00&Pr_efCd=03&Ver_si_onCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益財団法人いきいき岩手支援財団
所在地	岩手県盛岡市本町通3丁目19-1 岩手県福祉総合相談センター内
訪問調査日	平成28年3月1日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホーム「後ノ入」は平成23年4月に開所し、まもなく5年目に入ろうとしています。当事業所は「大樹を育む」を理念に掲げ、ご利用されるお年寄りと共に成長し、地域にとって愛される事業所を目指しています。また、昨年から「目線を合わせ、耳を傾け、思いを伝える」というケア理念をスタッフ全員で構築し、お年寄りの皆さんと生活を共にしています。

事業所として特に力を入れているのが、地域との関わりです。当事業所は東日本大震災時、避難場所として地域の方々にご利用いただいた経緯があり、喜怒哀楽を共にした仲間として認識していただきました。この関係を現在も継続し、事業所として地域に貢献するため、二つ目の公民館として活用いただいている「赤崎ホッとハウス」の建設や、世代間交流の場所として活動を行ってきました。地域にとって必要とされ、何かあればすぐに相談できる距離感を大切にしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所の優れている点として、まず「地域とのつながり」が挙げられる。「赤崎ホッとハウス」(地域住民交流施設)を作る段階から地域の方々の意見を取り入れていたこともあり、「ホッとハウス」を通しての交流が深まってきている。また、学童の子供たちと地域の方々の交流に加え、利用者も地域の子供たち(小・中学生)との交流が行われている。震災以降、助け合いの思いも相互で強くなったと感じている。今後も事業所と地域との双方向の強固な関係構築が期待できる。そして、「管理者を含めた職員間の連携がより良くなされている」ことも挙げられる。職員同士の関係の良さが、利用者のケアに反映されてくることを職員自身が理解していることが、雰囲気として出ている。また、ケア理念を職員皆で考え、掲げ、「利用者本位」を更に深め実践している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所理念を「大樹を育む」とし、事業所を一本の木に例えて共に成長しあう事を理念としてます。 また、「目線を合わせ・耳を傾け・思いを伝える」というケア理念を今年度作成し、利用者の立場になって考えることを大切にしています。	事業所理念が、日常のケアの中でより具体的にイメージすることができる一本柱が欲しいとの思いから、ケア理念を構築した。職員が外部研修に行ったことを契機として、職員自ら考える力と、職員同士の共有が図られている。また、「利用者目線」の再考の機会ともなり、職員も意識が変わったことを管理者は感じている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	当事業所は地域との関係を最も重視していません。防災訓練や、子供とお年寄りの交流だけでなく、「赤崎ホッとハウス」を基盤に地域の方々が気軽に来所できる場所を目指しています。	「赤崎ホッとハウス」(地域住民交流施設)を作る段階から地域の方々の意見を取り入れていたこともあり、「ホッとハウス」を通しての交流が深まっている。また、学童の子供たち(小・中学生)と、地域の方々や利用者との交流が多く行われてる。震災以降、(地域との)助け合いの想いが、相互で強くなったと感じている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議で地域の課題を抽出し、補助金を活用して地域交流スペース「赤崎ホッとハウス」を建設しました。現在では事業所との交流だけでなく、趣味活動やお茶のみ場、会議等に活用いただいています。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所の活動や運営状況を一方的に伝えるのではなく、地域に隠されているニーズの把握や、共通した目標を探す場として活用しています。	運営推進委員の他に、学童や小学校の関係者も参加することがある。小規模多機能ホームとの合同開催となっている。会議のメンバーで、民生委員の方から、仮設での認知症出前講座をしてはどうか等の意見が出ており、今後、実現に向けて取り組んでいきたいと考えている。また、地域を視野に入れた総合事業への取り組みも大切に考え、取り組むこととしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議への参加や、様々な補助の情報を頂いたり、相談できる関係性を構築しています。	行政(市役所)には、ホッとハウスや備蓄などについて、相談に乗ってもらっている。また、運営推進会議においても、意見や助言等をいただいている。市主催の地域ケア会議が定期的開催され、出席した職員は、職員会議等で報告している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については研修会だけでなく、なぜしてはいけないのかを考え、自分が利用者だったら、また、自分の大切な人を預ける立場に立って考える事を大切にしています。	法人全体で、倫理・虐待防止の研修会のほか、身体拘束廃止についても研修会を実施しており、ホーム職員も参加している。また、職員間でも勉強会を行っている。スタッフ間で(互いの)フォローも忘れないようにしている。安全と、(利用者の)思いのどちらを優先させた方がいいのか等のジレンマが生まれることもあるが、職員間で共有し、チームケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者の虐待については、利用者を大切にすケア理念を構築した事によって、さらに理解が深まっています。ケアされる立場になって考えることを重視しています。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業を活用されている方が1名おり、社協と連携を取りながら、その方が安心して暮らせるよう取り組んでいます。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、契約書・重要事項説明のほか、当事業所の特徴等も説明しています。また、契約時以外でもお問い合わせがあれば何でも気軽に聞ける関係を構築できるよう配慮しています。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議への参加や、日常的に健康状態の連絡を行い、ご家族が安心してご利用できるよう配慮しています。	家族には、行事毎に声掛けしており、参加を促している。利用者の体調の変化は、家族に報告している。入居したばかりの利用者は、頻回に連絡すよう努めている。また、面会時に利用者の状態を伝えるようにしている。家族によっては、利用者の好きな食べ物や飲み物を送ってきており、利用者が食べることができるよう支援している。利用者や家族の思いを反映させるよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度のミーティングや、毎日の申し送りの中で、利用者に関することや業務に関する提案は自由に話せる環境を作っています。	管理者は、職員のチャレンジ精神や自主性を高めるよう意識して働きかけている。トップダウンの運営にならないよう、職員の「やり甲斐」を考える中で、長期休暇取得を実現している。当該事業所の職員定着率が高いことも、より良い環境によるものだということが窺い知れる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	雇用環境については法人全体での考えや、職員一人ひとりの考えのすりあわせを行い、身体的・精神的に充実した環境を作れるよう努力しています。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	人材育成については、全体のミーティングや研修会で行なっています。外部の研修にも可能な限りだしていますが、全員とはいかず、今後さらに増やしたいと考えています。また、個人個人の目標設定や面談する時間を作りたいと考えています。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内のグループホームだけでなく、沿岸南ブロックの研修会への参加や、岩手県のグループホームの研修会へ参加し交流しています。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用開始時には、ご家族や担当のケアマネから情報を収集するほか、利用される前に顔を合わせる機会を作り、安心してご利用できるよう配慮しています。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用するに至るまでの経緯や、ご家族の悩みをしっかりと伺い、本人だけでなく、ご家族の気持ちにも寄り添ったケアができるよう配慮しています。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、ご家族のニーズの把握をしっかりと行い、グループホームでの生活が安全、安心に繋がるよう配慮しています。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ケア理念を忘れず、ケアされる側の気持ちを常に考える姿勢を大切にしています。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居後はご家族にも定期的に来所していただけるよう取り決めに交わし、ご家族との関係が切れてしまわないように配慮しています。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	来所しやすい環境や、馴染みのお店に通う機会を設け、関係性が途切れないよう配慮しています。	家族の協力を得つつ、利用者の馴染みの理・美容店へ散髪やパーマをかけに出かけている。兄弟や親戚の方が訪ねてくることもある。震災により、馴染みの人や場所を失った方も少なくないが、これまでの関係などが途切れないよう情報収集しつつ、友人等との関係も保たれるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日常的な家事については、一人ひとり役割分担し、共に生活している方々が必要とされる環境を目指しています。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	お亡くなりになったご利用者のご家族と手紙でやり取りをしたり、遊びに来て頂けることもあります。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	担当のスタッフを決め、アセスメントをしっかりと行なっています。しかし、認知症や身体機能の低下により伝えられない利用者に関しては、表情や反応を見ながら行なっております。	利用者の思いを汲んで、知り合いの方に(来て頂けるように)働きかけるようにしている。利用者の一瞬(喜びや感動)のために、より良いケアを心掛けている。利用者の思いを踏まえ、日常的に行っていたことを継続できるよう取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居される前の生活歴を大切にすることはもちろん、グループホームでの生活にも活かせる事は継続し、生き生きとした暮らしに繋がるよう支援しています。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その方の持つ残存能力に合わせ、日常生活の中で役割を持って頂いております。また、状況が変わってしまってもなんらかの役割を作り、張りのある生活が送れるよう支援しています。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプランは基本ケアマネージャーが作成しますが、担当者会議等で情報を共有し、現場職員の意見が反映されるよう努めています。	ケアプランを作成するために、担当者会議を開き、利用者を取り巻く関係者の意見等を聞いている。ケアプランには、地域との関係を断ち切らないような内容も含まれており、住み慣れた地域での暮らしを支援する利用者の思いに沿ったものとなっている。3ヶ月ごとにモニタリング、更新・変更が行われている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録については、個別の記録以外にも気づきノートを作成し、全員が目を通し、記入できるよう工夫しています。また、記録の量にも気を配り、スタッフが記録にばかり時間を取られないよう効率も大切にしています。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	事業所の特徴である、地域との関係性を活かし、子供たちとの交流や、地域へ出て活動する事を行っています。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用者を取り巻く環境を把握し、ご家族だけでなく、友人や地域、あらゆる資源を活用しより良い生活を目指しています。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前からの関係性を重視し、かかりつけ医への受診をお勧めしています。受診についてはご家族対応とし、健康状態を把握していただく機会になっています。	利用者各々のこれまでのかかりつけ医に通院しており、家族による通院介助を基本としている。定期的な通院により、適切な医療を受けられるとともに、(通院対応して頂くことで)利用者や家族等の関係も保たれるように考えている。利用者の状態(状況)が思わしくない時は、職員が付き添うこともある。通院時には、事業所で日常的に記しているバイタルの写しを家族へ渡して、日常の様子が伝えられるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	非常勤の看護師を採用し、健康状態の把握や、受診への判断、医師との連携等を行なっています。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者の重度化に伴い、医療機関との連携が更に求められるようになりました。入院時、退院時はそれぞれ連絡を取り合いながら、退院しても安心して暮らせるよう支援しています。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期については、ご家族の意向やご本人の意向をしっかりと把握し、グループホームで出来る事、出来ない事をしっかりと伝えご理解を頂きながらケアに努めています。	看取り対応を行うことを、契約時に話している。実際の状況は、個別的に段階を経て、話し合いを持っている。利用者ごとのかかりつけ医によって、事業所として対応が可能なことや、その範囲が変わってくることから、適切に見極め、対応することとしている。重度化や看取りに関する勉強会は利用者の状況に応じ、個別的に管理者が中心となって行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時マニュアルを作成のほか、スタッフ全員が救命救急の対応ができるよう研修を行い、万が一に備えています。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時には事業所が避難場所となるため、食糧の備蓄やささまざまな物資を備え、地域の方々と連携しております。	年に1回、市主催の防災訓練に参加しているほか、年2回、事業所での避難訓練も行っている。火災訓練の場合は、日勤帯想定で、津波の避難訓練の場合は、夜間の想定で実施しており、地域の方にも協力していただいている。拡声器を使用し、声が広範囲に届くように取り組んでいる。備蓄等については、食料品はもとより、発電機や毛布、紙類等の備品についても地域の避難拠点を意識し、準備している。	地域において自主防災組織が組織されているが、事業所としては、その組織に現時点では位置づけられていないことから、運営推進会議委員の方からの助言にもあったことから、当該組織と協働するような取り組みに期待したい。また、災害対策として事業所裏手の山側の土砂崩れ等の対策や有事の際の対応、判断基準等についても、地域も交えて検討していくことを望みたい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の尊厳を守り、心地良く過ごせるよう配慮しています。	法人の年間研修等スケジュールの中に、プライバシーに関する研修も含まれており、勉強をしている。利用者とのより良い関係を築くため、地元の訛りも交えて親しみを込めるも、人格の尊重や誇りを保てるような関係を築いている。利用者の「聞こえ」の状況にも配慮し、声掛けを行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中では様々な場面で選択肢を持たせ、自己決定が出来るよう配慮しています。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの生活のペースの把握と、グループホームでの生活のすりあわせを行い、利用者が無理の無い暮らしが出来るよう支援しています。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	朝の整容や、入浴後には鏡を見てもらい、満足の行く身だしなみが出来るよう支援しています。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は何よりの楽しみなので、利用者の好き嫌いはもちろん、栄養バランスを考えそれぞれのスタッフが工夫しながら毎日作っています。また、買い物や調理にも参加いただいています。	毎日の食事メニューは、作ったものを記録している。献立をはじめに立てるのではなく、家庭の食事のように冷蔵庫にあるものや、利用者で食べたいものを話したりする中で考え、作っている。魚類が好きな方が多い。また、気分を変えて、お弁当を作り、ドライブがてら、外で食べてくることもある。差し入れ(野菜や魚介類)をいただくこともある。持病等がある方も、楽しく食事ができるよう、工夫しながら取り組んでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	重度化が進み、水分や栄養バランスを特に重要視しています。摂取しやすい工夫や様々な品物を試し、より良い健康状態に出来るよう支援しています。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアは、毎日の健康状態に繋がる重要なものなので、毎食後しっかりと行い、口腔内の環境保持に努めています。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	尿意や便意を大切に、毎日をペースを把握しながら支援しています。	利用者の半数以上の方は、排泄時の着衣等が難しく、介助が必要であるが、利用者の自信を損なわないよう対応している。また、自立の方も、衣類の清潔保持や状況をそれとなく確認するようにしている。ケア等により、リハビリパンツから綿の下着に状態がよくなった方もいる。個々のペースを大切に対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取だけでなく、ヨーグルト等の乳製品を毎日摂取しております。下剤については調整しながら使用し、毎日お通じがあるよう支援しています。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴に関しては、個別に対応しスタッフと会話を楽しみながらゆっくりと入浴を楽しんでいただけるよう支援しています。	入浴は、2日か3日ごとに入っていたりできるような支援している。入浴をしない方も、清潔保持や温めの効果をもたらすよう足浴を実施している。また、入浴の拒否等がある場合は、タイミングを見計らっての声掛けにより、入浴へ結び付けている。一番風呂を希望する利用者が多いことから、湯船の状態を見ながら、一番風呂の気持ちを味わってもらえるよう、取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠に関しては、それぞれの生活習慣を大切に、安眠出るよう支援しています。また、眠れないときには夜勤者とお話をしながら、無理なく休んでいただけるよう配慮しています。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬している薬の目的を把握し、体調の変化に気をつけながら毎日関わっています。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日の生活の中では、それぞれの身体能力に合わせて役割を持っていただいています。スタッフと一緒に、色々な会話をしながら楽しんで行なえるよう配慮しています。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節に合わせたバスハイクや遠足等を企画し、利用者の希望に合わせた支援をしています。また、ご家族と一緒に過ごしていただける時間も大切に、ご理解を頂きながら支援しています。	病院の通院の帰りに、家族と外食をしたりする利用者もいる。小規模多機能ホームとグループホーム合同で、釜石大観音へのドライブを行ったり、お花見、紅葉狩りなどへ出かけている。日常的には、近隣の散歩や利用者の個別的な買い物(洋服など)への支援・同行なども行っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お買い物に行った際は、お支払いを利用者の手から渡していただくなど支援しています。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の希望があればご家族のご協力を得ながら行ないます。基本的には直接来所していただいております。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間で過ごされる方々がほとんどですので、過ごしやすい環境を整えるよう支援しています。光の入り具合や温度、湿度を管理しゆっくりと過ごせるよう配慮しています。また、作品も展示して楽しめる工夫をしています。	天井が高く、窓も多く、採光もよく、明るい空間である。利用者の中には、目の既往症などにより陽(ひ)の光が眩し過ぎる方もおり、光の加減も調整し、居心地の良さを醸し出している。また、利用者同士の関係性も考慮し、座席の位置への配慮も行われている。共用空間から見える庭作りにも力を入れており、木を植え、数年かけての景観づくりの成果が楽しみである。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気持ちの変化により共有空間から離れたい方に関しては、外を見ながらゆっくりと過ごせる場所も作っており、対応しています。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	当事業所では、被災された方が多く、馴染みの家具が配置できない状況にありましたが、備え付けのクローゼットや筆筒を活用し対応しています。	被災されている利用者が多く、居室は馴染みの品等の持ち込みがあまり見られない状況であるが、趣味の品として、日めくりカレンダーの紙で兜を折り、飾っている方などがある。備え付けの一つで、ベッドがあるが、利用者の希望により、フローリングに畳を敷き、布団ベッド(マットレスタイプの布団)を使用している方もいる。利用者の殆どが、居間にいることが多いことから、居間の居心地の良さを考えることが多い。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	リスクマネジメントを行ないながら、自立した生活が送れるよう支援しています。		